

ラーニング・コモンズでの学習支援の取り組みとその評価 —ラーニング Café を事例に Assessment of a Learning Event in Learning Commons

佐々木知彦（関西大学教育開発支援センター）
岩崎千晶（関西大学教育推進部）

要旨

関西大学では、2013年度にコラボレーション・コモンズ、2015年度にラーニング・コモンズを開設し、さまざまな学習支援に取り組んでいる。本論文では、そのひとつである「ラーニング Café」の2014年度から2016年度の取り組みを紹介し、参加者アンケートを基にしながらその成果と課題を整理した。その結果、熱心なリピーターの存在や高い満足度が確認された。また、自由記述欄からは、受講者がその回で学んだ内容を自分の経験や知識と結びつけている様子もうかがうことができた。一方で、参加者の所属学部が大きなばらつきがあることや、ラーニング Caféの取り組みが参加者の学びにどの程度寄与できているかを測るのは現時点では困難であることが明らかになった。そしてより効果的な学習支援のあり方として、そうした取り組みの客観的な評価の面でも広報の面でも、正課との関わりを強めていくことが有効であると結論づけられた。

キーワード ラーニング・コモンズ、学習支援、アカデミックスキル、初年次教育、ピア学習／
Learning commons, Learning support, Academic skills, First-year Experience, Peer learning

1. はじめに

ラーニング・コモンズは1990年代以降の北米の大学図書館に端を発する（鈴木 2016、中山 2016）。そして岩崎（2014）が概観しているように、2000年代後半のアクティブ・ラーニングの啓発と時を同じくして、ラーニング・コモンズが日本の各大学でも広がりを見せている。それに伴い、ラーニング・コモンズの設置・運営による学生の学びの成果を調査する大学も見られ始めた。たとえば同志社大学は、全学部生を対象としたアンケートを基に、ラーニング・コモンズの学習成果を測っている（浜島 2016）。また同大学は、ラーニング・コモンズでの学習支援と正課教育との連携がいかに行われているかを紹介している（鈴木 2016）。しかし、こうした学習支援の個別の取り組みに関する評価については、今後それらの報告が待たれるのが現状である。

そこで本論文では、関西大学においてラーニング・コモンズに先んじて開設されたコラボレーション・コモンズでの学習支援の取り組みであるラーニング Caféを取り上げる。ラーニング Caféは、レポート作成やノートテイク、プレゼンテーションなどをテーマにしたアカデミック基礎講座として展開されているものである。本講座の取り組みを紹介したのち、参加者アンケートを基にその成果や課題を明らかにし、より効果的な学習支援の方法を探る手がかりとする。

2. ラーニング Café の概要

関西大学は、2013年度にコラボレーション・コモンズを開設し、学生の正課外学習を支援している。そこではノート PC、iPad、電子黒板を貸し出したり、グループワークがしやすいような什器、ホワイトボードなどを設置したりすることで、学

生の自主的な学習活動を支援している。

学生が協同学習を進めやすい環境を整備することに加えて、大学は外国人留学生との外国語会話交流会や、レポート作成、プレゼンテーションなどをテーマにしたアカデミック基礎講座などを開催して学習支援を展開している。この後者をラーニング Café と題し、主に初年次生を対象としたアカデミックスキルを学ぶミニ講座として、コラボレーション・コモンズの開設と同年度 2013 年度に開始している。講座の名称は、大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」の共同校である津田塾大学が実施する「ライティングカフェ」を参考に命名された。本講座はこれまで、リーディング、ライティング、プレゼンテーション、ノートテイク、グループワーク、ディスカッションなどのテーマで展開されており、受講者は関心のあるテーマを選んで自由に参加できる。講座は受講者が参加しやすいようデザインされている。所要時間は、授業 1 コマよりも短い約 60 分に設定されている。知識伝達型の講義形式ではなく、グループワークを取り入れ課題を実践したり参加者同士で意見を交換したりするかたちで進められる。その他にも、お菓子を用意することで和やかな雰囲気できげに学べることを特徴としている。

開催日は正課科目との兼ね合いから、基本的に学生が最も集まりやすい水曜の 4 限としている。講座を担当するのは教員と研究員で、ファシリテーターとして学生スタッフが 2 名程度参加している。加えて、学生スタッフが講座を担当する「学生同士で学ぶラーニング Café」も 2015 年度から本格的に開催している。そのほか、教職志望の学生による「教職ラーニング Café」や、「卒論 Café」も学生が自発的に開催している。前者は教員志望の学生が担当し、教育実習の様子や教員を目指す理由、教育への思いなどについて意見を交換する場となっている。後者は 3 月に開催されるもので、卒論を書き終えた 4 回生が、下級生に対してその体験談を基に話しあう機会となっている。どれも

学部の垣根を越えて気軽に学ぶ機会として、こうしたピア学習の環境を広めている。以下の表 1 から表 6 は、2015 年度から 2016 年度に開催した各回のタイトル一覧である（※印は学生担当回）。

表 1 2013 年度の開催日とテーマ

6/24	論理的に話そう！
6/28	伝わるプレゼンをしてみよう！
7/1	伝わるスライドを作ろう！
7/5	期末レポートの書き方対策！
10/7	相手に自分の意図を分かりやすく伝えるコツ！
10/21	ノートテイクに悩んでいませんか？ 第 1 回「ライブレコーディング」
10/25	いいね！といわれるスライドをつくるコツ！
10/28	ノートテイクに悩んでいませんか？ 第 2 回「インデント」
11/7	司会と書記の役割※
11/8	文献を速く読むコツ①—短い文章編
11/14	みんなの考えを出してみよう※
11/15	文献を速く読むコツ②—本まるごと一冊編
11/22	クリティカル・リーディングとは？
12/2	【応用編】議事録を作ってみませんか？～ノートテイクのスキルの応用～ 議事録を作成してみよう
12/9	議事録を作成してみよう
12/5	文献をわかりやすく整理してみよう※
3/19	先輩に聞く！卒論のあれこれ※

表 2 2014 年度の開催日とテーマ

5/14	文章を速く読むコツ！
5/21	1 冊の本を早く読むコツ！
6/4	相手に自分の意図を分かりやすく伝えるコツ！
6/11	「いいね！」といわれるスライドをつくるコツ！
6/18	【超基本】『ノートテイクに悩んでいませんか？』 —私なりのノートをつくっちゃお—
6/25	【超基本】『ノートテイクに悩んでいませんか？』 —私なりのノートをつくっちゃお—
10/15	本を速く読むコツ
10/22	レポート・プレゼンにつながる！読書ノートの作り方

10/29	クリティカル・リーディング入門
11/12	相手に自分の意図を分かりやすく伝えるコツ！
11/19	「いいね！」といわれるスライドを作るコツ！
11/26	英語で分かりやすく伝えるコツ！
12/3	自分の考えを整理しよう！※
12/10	学ぼう、グループワークのコツ！※
12/17	みんなの意見を整理しよう！※

表3 2015年度の開催日とテーマ

5/13	文章を速く読むコツ！
5/20	クリティカル・リーディング入門
5/27	情報整理術！可視化編
6/3	情報整理術！管理編
6/10	要点をつかむ※
6/17	みんなを巻き込め！グループワークのテクニック※
6/24	"PREP"でプレゼンは伝わる！※
7/8	相手に自分の意図をわかりやすく伝えるコツ！
7/15	考え方を整理してみよう！
10/14	読書・リーディングと自分との関係を考える①速く読む
10/21	読書・リーディングと自分との関係を考える②クリティカルに読む
10/28	読書・リーディングと自分との関係を考える③精読する ～感想を書く
11/11	要点をつかむ Vol.2 ※
11/18	"PREP"でプレゼンはもっと伝わる！※
11/25	グループワークの役割※
12/9	コモンズのプロジェクト—一体型ホワイトボード（電子 黒板機能付き）を使って 伝わるプレゼンテーション&授業をしよう！ Part1&Part2(操作編)
3/7	他の学部の人はどう見る？色々な観点から議論してみよう！※
3/25	先輩に聞く、卒論のあれこれ！※

表4 2015年度 教職ラーニング Café 開催日

6/22	自分を知って話してみよう！
6/29	現場を知ろう！

11/12	自分を知って話してみよう！
11/19	道徳の教科化について考えよう！
11/26	学力とは何か
12/3	学級運営について学ぼう！
12/10	カウンセリングマインドを体験してみよう！
12/17	キャリア教育について学ぼう！
1/14	理想の教師像
3/10	春の特別版 第一部：いじめについて 第二部：生きる力について 第三部：教職あれこれ

表5 2016年度の開催日とテーマ

5/11	文章の読み方—要約と速読
5/18	クイックリサーチの Tips ※
6/1	情報整理術（その1）：情報やアイデアの整理に役立つ 「ポストイット」の活用法
6/8	情報整理術（その2）：情報やアイデアを見える化する！ 「マインドマップ」の活用法
6/15	人を動かすプレゼンテーション
6/24	PREPを使えばプレゼンだってこわくない！ ※
6/29	グループディスカッションのコツ！—自分はどう動く？ ※
7/6	英語リーディングのコツ！初級～中級編
7/7	グループワークの技術：「聴く」、「伝える」※
7/13	英語リスニングのコツ！初級～中級編
7/14	交渉学のキホン！“win-win” ※
10/12	本の読み方 ①速く読む
10/19	本の読み方 ②精読する
10/26	情報整理の達人になる！シンキングツールをつかって みよう！
11/9	ノートの書き方「悩んでませんか？～明日の講義から使える！大学生のノートの取り方～
11/16	スマホでできる！情報整理術
11/18	生活の中の交渉学※
11/30	根拠を示そう！ プレゼン型グループワーク※
12/5	見やすいプレゼン資料の作り方※

12/15	生活を良くする考え方—SWOT 分析を使ってみよう！ ※
-------	---------------------------------

表 6 2016 年度教職ラーニング Café

6/23	相手の心を掴む自己紹介を試みよう
11/10	教育実習のあれこれ！
11/17	知っておきたい「ICT」のこと
11/24	開かれた学校づくり～保護者・地域を教師の立場から見つめよう～
12/1	インクルーシブ教育について考えよう！
12/8	生徒・児童をもっと理解するためには？
12/22	教員採用試験に合格するために今、何ができるのか？

3. 研究方法

調査はラーニング Café の 2014 年度から 2016 年度の各回終了後に、参加者全員に対して質問紙により行われた。有効回答数は 2014 年度が 99 件、2015 年度が 93 件、2016 年度が 104 件である。

質問は、2014 年度と 2015 年度が、(1) 学年、(2) 学部、(3) 参加回数、(4) 開催をどこで知ったか、(5) 参加理由、(6) Café マスターの設定項目(担当者が設定する受講者の到達度自己評価)、(7) 全体的な満足度、(8) 7 の理由、(9) ラーニング Café を振り返り、学んだこと、考えたこと、(10) 新たに提起してもらいたいテーマ、(11) Café の感想、Café スタッフへの意見、の 11 項目である。(8)、(9)、(11) は自由記述で、それ以外は選択式である。2016 年度はそれまでの (10) と (11) を統合し、「提起してほしいテーマ、スタッフや Café への要望等」として自由記述としている。ただし、2016 年度のみ、教職ラーニング Café のアンケート結果も反映している。

4. アンケートの分析結果

4.1 参加者の傾向

図 1 が示すように参加人数はそれぞれ、2014 年度が 99 名(春学期 56 名、秋学期 43 名)、2015 年度が 93 名(春学期 53 名、秋学期 40 名)、2016

年度が 105 名(春学期 45 名、秋学期 60 名)であった(図 1 参照)。2016 年度秋学期の参加者がそれまでより増えているのは、教職ラーニング Café のアンケート結果を反映させているためだと考えられる。したがって参加者は例年大きな変化はないことがわかる。

参加者の学年は図 2 の通りである。2014 年度は、1 年生が 46 名と最も多く、2 年生と 4 年生が 18 名、3 年生が 10 名、留学生 1 名、その他(大学院生や科目等履修生) 1 名であり、低学年であるほど参加者が多く、初年次生向けの講座として受容されている。しかし 2015 年度では、1 年生の割合が下がる。2016 年度になると、1 年生の参加は上位年次よりも少なく、4 年生が最も多い結果となっている。これに関しても教職 Café のアンケート結果が反映されている。

教職 Café の参加者は 1 年生が 0 名、2 年生が 4 名、3 年生が 8 名、4 年生は 12 人であった。これらを差し引いても、2016 年度のラーニング Café は 1 年生の参加が最も少ない結果である。要因としては、2014 年度と比べ、続く年ではテーマがやや高度化していることが考えられる。英語学習法や交渉学などは初年次教育の枠には縛られないテーマである。そのようなテーマが増えることで、ラーニング Café そのものが、当初のアカデミックスキル養成講座としてよりも、むしろそういった枠に入らない勉強会として認知されていったのではないかと考えられる。実際、初年次とは別のテーマのニーズがあることが確認されている。アンケートの(10)「提起してほしいテーマ」において、「スピーキングの上達法などがあれば教えていただきたいです」、「外国人の生の声をきいてみたいと思いました」、「英会話について(国際部に行きづらいのでアウトプットの方法を教えて欲しいと思いました)」、また、「心理学を学んでいる人が集まってちょっとした勉強会をするなどがあったら面白いかなと思いました」など、外国語や専門領域を学ぶ機会も求められていることが分かった。

参加者の所属学部は、表 7 に見るように文系学部に多いことが明確になった。中でも 2015 年、2016 年は文学部の学生の参加が圧倒的に多い。こうしたばらつきを解消し、また理系学部の学生への普及を進めるためにも、各学部の時間割との兼ね合いや、正課との連携の方法を見出していく必要がある。

参加回数については図 3 と図 4 が示すように、2014 年度と 2015 年度までと比べ、2016 年度で参加回数の上限を増やすかたちで項目を調整している。2015 年度までに二回と三回よりも四回以上参加しているリピーターが見られたためである。2016 年度には、はじめて参加した学生の割合が増えているものの、選択肢を細分化することで、四回以上の内訳がより明確になっている。今後は、そうした参加者へのヒアリングを実施することで、本取組の成果を測る材料となりうる。

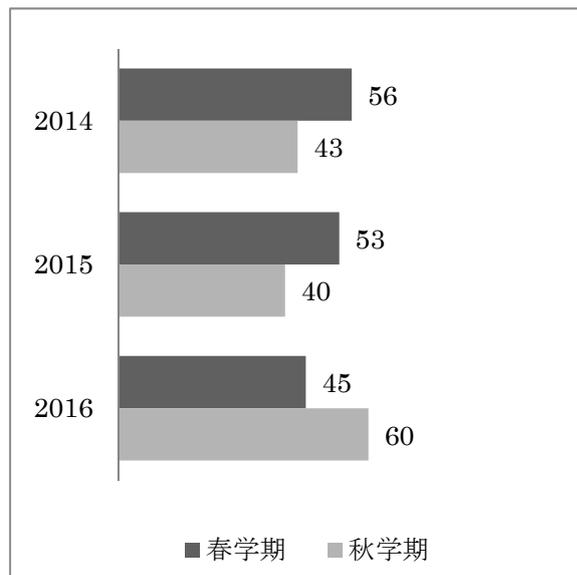


図 1 参加者数

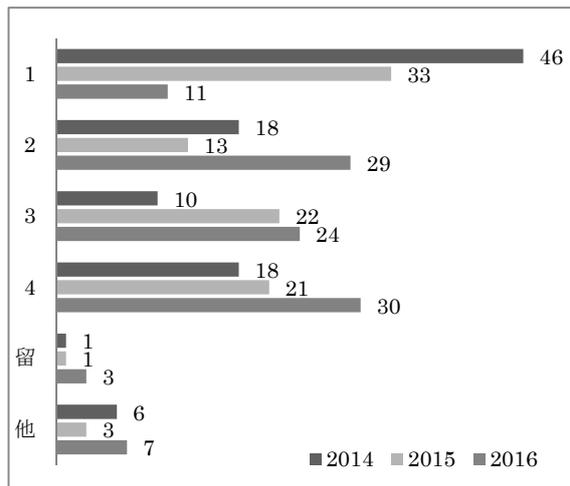


図 2 参加者の学年

表 7 参加者の所属学部

	2014	2015	2016
法	30	8	6
文	14	40	46
経	5	4	5
商	9	7	21
社	15	5	6
政策	4	3	9
外国語	1	0	0
人間環境	0	0	1
総合情報	3	1	0
社会安全	0	0	0
システム 理工	4	12	6
環境都市	6	2	2
科学生命	4	1	0
その他	4	0	1

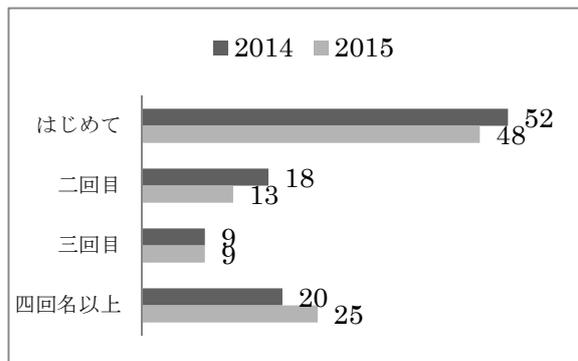


図 3 参加回数(2014・2015 年度)

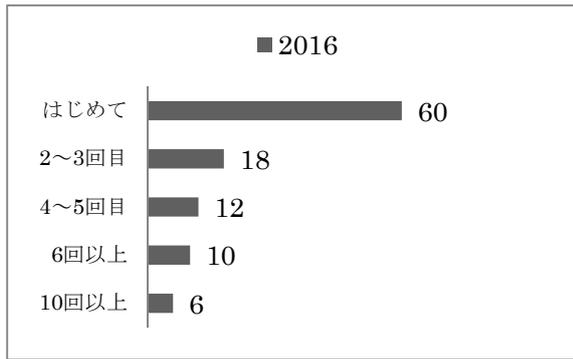


図4 参加回数(2016年度)

4.2 宣伝方法

ラーニング Café の開催をどこで知ったかという質問は、年により大きな違いが出た。図5に見るように、2014年度にはフライヤーの学内掲示とインフォメーションシステムによる効果が主であった。2015年度は学内掲示の割合が低かった反面、友人の紹介による参加が数多く見られた。その傾向は2016年度にも引き継がれ、さらに教員からの紹介の数も伸びている。それまでも、アカデミックスキル系の授業の担当教員に対し、授業での学生への呼びかけを依頼してきたが、その件数を増やしたことが功を奏したと思われる。

学内掲示とインフォメーションシステムでの広報は継続しつつ、そうした授業との連携は、取り組みを評価する際にも広報の際にも有効だと考えられる。たとえば、授業やゼミでの課題に対応する時期とテーマで開催することで、正課での学びにより直接的に寄与することができる。

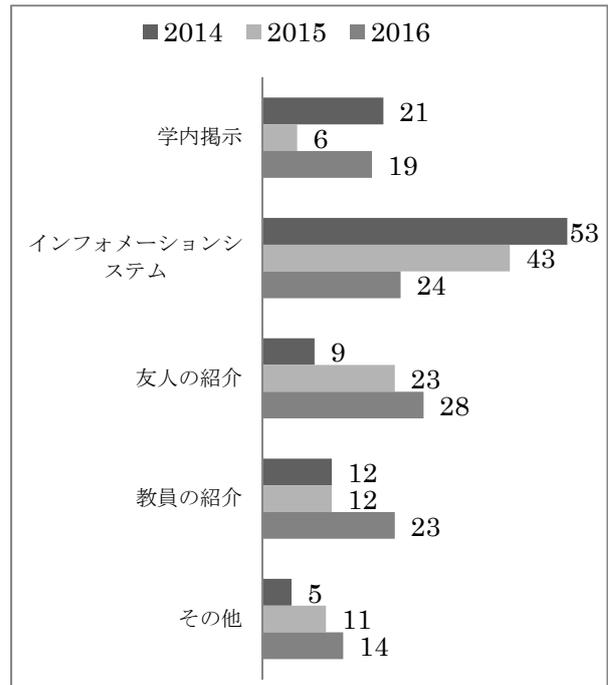


図5 どこで開催を知ったか

4.3 参加動機

参加者の参加動機からも、ラーニング Café と正課との結びつきが弱いことがうかがえる(図6、7参照)。どの年においても「授業で必要だった」との回答は少ない。「苦手な分野を克服したかった」、「この分野の力をさらに伸ばしたかった」、将来的に役立つと思った」という、意欲の高い個人の自主的な参加が主流である。岩崎(2011)が指摘しているように、学習支援を利用しない学生は、「利用する方法がわからない場合や、どうすれば自分の学びにつながるのかを明確に認識できていない場合」もある。より多くの学生に学ぶ機会を提供するためには、正課との関係をどのように築いていくべきか考えなければならない。

鈴木(2016)は同志社大学での学習支援の取り組みに、成績への加点というインセンティブの設定により参加者が激増したことを報告している。しかし「取り組みがどれだけ学生の自律的な学習能力の向上や、今後の学びへと繋がっているのかは明らかになっていない」という。このように量の面からだけでなく、質の面でも学習支援を効果的に提供するためにはどのような方法が有効であ

るだろうか。2014年度に、関西大学経済学部のあるゼミ担当教員から、ラーニング Café のうちいくつかの内容をゼミの三年生を対象にした出張講義の依頼があった。卒論に向けた基礎的なスキルの理解と習得を促したいとの目的であった。この例やラーニング Café の取り組みに見るように、アカデミックスキルは初年次の学生のみ求められるものではない。したがって、初年次科目だけでなくゼミとの連携は、学習支援のサービスを広めるうえで有効だと思われる。

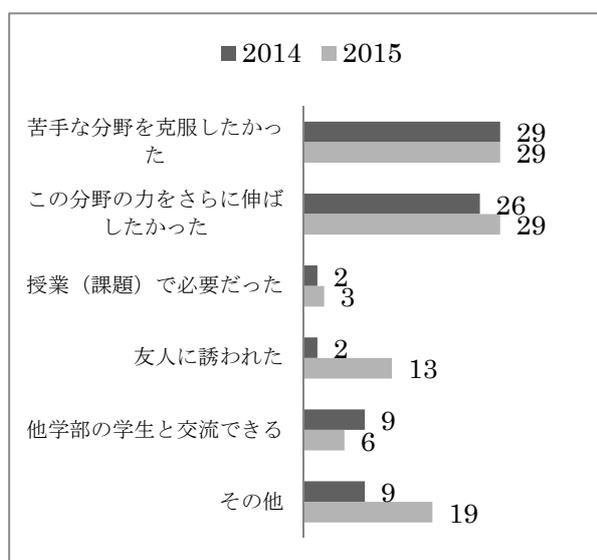


図6 参加動機(2014・2015年度)

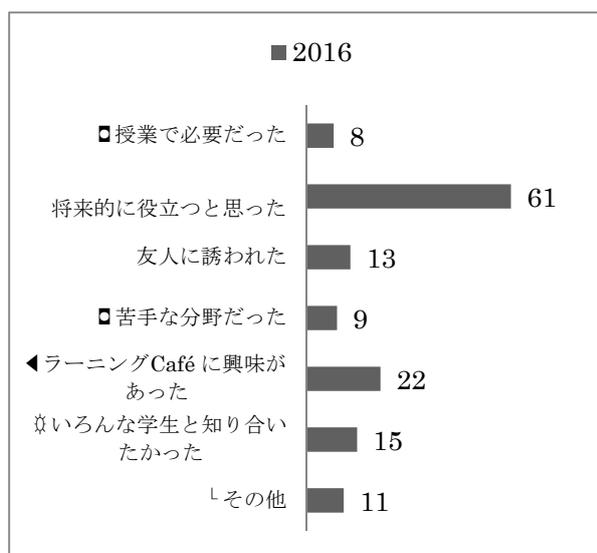


図7 参加動機(2016年度)

4.4 参加回数・開催日

スタッフへの意見として、「もっと回数を増やしてほしい」、「水曜日以外にも開催してほしい」、「昼休みに開催してほしい」といった声が寄せられていた。このことから、授業との重複でラーニング Café に関心があっても参加できない学生がいることが考えられる。また、「去年来れなかったのが来てよかった」というコメントも見られた。このように潜在的な参加者の存在も確認できるため、従来通り同じ曜日と時間に開催することに加え、同一テーマで別の日に複数開催することも、学習支援を広めるために効果的だと考えられる。しかし担当者の確保や、別の担当者によって開催した場合の質の保証の観点から考えると困難が伴う。講座をテーマごとに教材化しインターネット配信により学習できる環境を整えることができれば、こうした課題に対応することができる。

4.5 受講者からの評価と達成度(1)

「Café マスターの設定項目」(図8)は、各回で担当者が設定する受講者の到達度自己評価である。たとえば例えばプレゼンテーションの回であれば「PREPの構成で話すことができる」といった項目を設定している。「かなりそう思う」と答えた参加者は2014年度と比べ2015年度では減少しているが、2016年度には大きく上昇している。この点から考えれば、本取組は一定の成果をあげていると言えるが、より詳細で厳密な評価を見るには、客観的な評価が必要になる。

2014年度と2015年度において「Café マスターの設定項目」は、「かなりそう思う」の割合より「まあそう思う」の方が高い。一方で図9に示す「全体的な満足度」は、どの年も「満足」が最も高くなっている。つまり前の二年に関しては、講座に満足はしているが、その回に扱った題材に関するスキルを理解し身につけた自信を強く感じているとは十分言えない。2016年度については、「かなりそう思う」の割合が「まあそう思う」を上回り、全体的な満足度の割合も伸びている。こうし

た結果からは、本取組の質が向上していると言える。とはいえ、学生の世代交代は教員よりも早い間隔で起こる。講座の運営だけでなく、次の世代の担い手の育成も同時に進められなければならない。

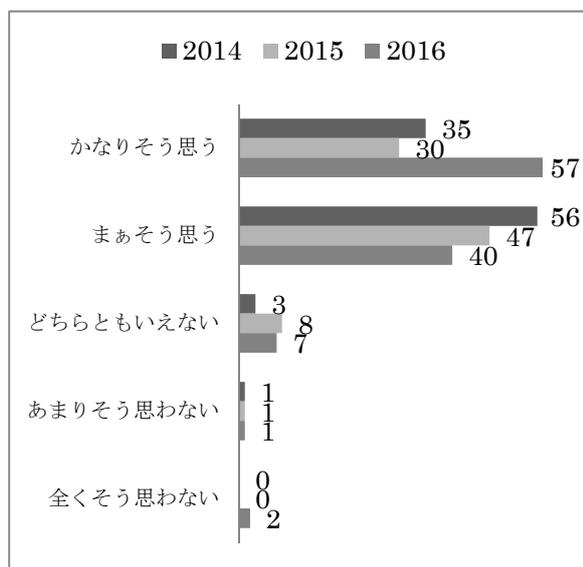


図8 Café マスターの設定項目

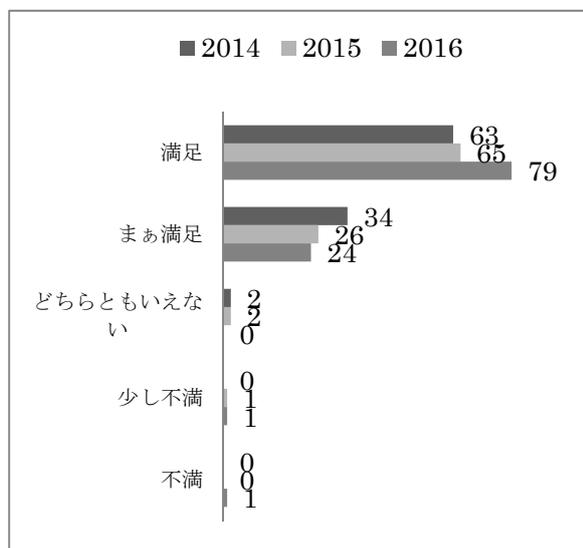


図9 全体的な満足度

4.6 受講者からの評価と達成度(2)

設問(9)「ラーニング Café を振り返り、学んだこと、考えたこと」からも、本取組の成果を見ることができる。記述内容を見ると、大別して4つの型に分類されることがわかった。まず最も多

かったのが、学んだ内容の反復と呼べるものである。たとえば「これまで本を読むときにあまり内容のまとめや文字を一言一句でなくまとめるとして捉えるなどできていなかったその方法を分かった」や、「シンキングツールを使って考える能力、とまとめる能力の大切さが分かりました」といったものである。

次に多く見られたのは、将来に向けての意思表明を含む感想と呼べるものである。「6/30 にプレゼンがあるのでしっかりと生かしたいです」や、「意見を広げる、まとめる方法について学んだ。自己分析で利用したいと考えた」などである。

上記の2つのタイプが大多数を占めたが、より自己を内省して書かれたものもいくつか見受けられた。たとえば、「板書するだけの授業などでも、ノートの取り方を工夫すれば、疑問をもちやすくなるのではないかと思いました」や、「速読の方法は、大方共通していると分かった。速読では、語彙力の強化や、フレーズの引き出しは本当に増えるのだろうか」というコメントからは、自分の経験や知識とその回で学んだ内容とを結びつけ、新たな問題意識を持ったことがうかがえる。また、「いままで交渉の目的だけが達成できればいいって考えてきたけど、それだけでは、見失ってしまうことが多かった。これからは交渉をうまくやっていけそうな気がする」というコメントからは、自己を客観視し、自分が苦手とすることを言語化している。

このような記述内容からも、ラーニング Café が受講者に学ぶ機会を提供できていることが確認できる。しかしそれらが正課との関わりの中でどのような意味を持つのかや、講座で扱った内容がどの程度身についているかといった問題に関しては、やはり客観性が十分に保たれているとは言えない。また、アンケート記入に割く時間は毎回まったく同じというわけではないのが現状である。それにより記述する量にも差が出るため、こうした記述内容から学びの成果を厳密に測ることは難しい。それでも、こうした記述式の項目は、成果

を測る一助にはなるだけでなく、こういった設問に答える機会を設けることで、受講者に振り返るきっかけをもたらすものとして機能していると言える。

5. 結論

3年分の受講者アンケートにより、ラーニング Café のいくつかの課題と成果が整理された。課題としては、受講者が学んだことをどれだけ活かしているかを評価することや、広報の手段にも関連して、正課とどのように連携していくかという問題が浮き彫りになった。

学習支援がより広く行き渡るような工夫も必要である。現在は講座内容と参加者共に文系に偏っているため、理系学部の新入生を対象とした数学や物理などの講座を設けることも求められる。ただし、これには本取組を運営する教育推進部以外の部署の協力を乞うことが現実的である。また、新たに切り上げてもらいたいテーマでもっとも多かったのはディベートであったが、現在は開催に至っていない。そのような不均等を是正するためにテーマの拡充は今後の課題のひとつである。

加えて、日時の都合がつかない学生や他キャンパスの学生など、ラーニング Café に参加できない学生のために、開催日時の工夫や、講義の動画配信なども検討する必要がある。さらに、外国語に関する学習支援のニーズや、学習支援の存在を知らない学生に支援を届けるためには、学部や他部署との連携も重要になる。そして講座を担当する学生の引き継ぎと育成を行う体制作りも不可欠である。このように、学習支援の取り組みには、組織内外の問題が絡み合っている。そのため、それらと連携を強めながら、支援の目標や対象、評価の方法をより明確に設定する試みが必要である。

一方で明確な成果も確認できた。広報の手段として、教員による授業内での呼びかけを働きかける余地があることが示された。また、本取組はアカデミックスキルだけでなく、交渉学や教職のようにより上位の分野や特定の職に関する学習支援

を提供し、それぞれ一定の成果を上げていることも確認できた。

ラーニング Café はまた、こうした受講者の学びだけでなく、講座を担当する学生の学びにも寄与している。学生担当回の開催数やテーマはともに初年度と比べより充実しており、主体的にイベントを作ろうとする学生の輪が広がっている。開催に関わった学生の成長がどのような点にどの程度見られるかについては今後調査が必要であるが、コラボレーション・コモンズ開設とラーニング Café の開催によって、より多くの学生が主体的・能動的に学ぶ場が広がっていることは確かだと言える。

参考文献

岩崎千晶「新しい能力を育む学習環境を考える」

岩崎千晶編著『大学生の学びを育む学習環境のデザイン—新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦—』関西大学出版部、2014年、pp.55-86.

鈴木夕佳・岡部晋典・浜島幸司（2016）「学習支援と学部教育はいかに連携できるのか：良心館ラーニング・コモンズでのセミナー実践をもとにして」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』第7号、pp.42-62.

中山貴弘（2016）「学習支援の拠点としてのラーニング・コモンズ：その日米比較と今後の展望」『大学教育研究』第24号、神戸大学大学教育推進機構、pp.117-129.

浜島幸司・岡部晋典・鈴木夕佳（2016）「ラーニング・コモンズが学生にもたらす学習成果：同志社大学良心館 LC 利用アンケート調査から」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』第7号、pp.3-24.

佐々木知彦（関西大学教育開発支援センター）

岩崎千晶（関西大学教育推進部）